

デジタル行財政改革 課題発掘対話（第1回）

提出資料

千葉大学 貞広 齋子



本日の構成

何がゴールで、なぜ実現できていないか

1. 利用者視点
2. 人口減少、人手不足
3. デジタルでの社会変革

1. 利用者視点

○ゴール：

- すべての子どものウェルビーイングと自己実現が確保され、社会的に包摂されること。
- 社会経済的環境に起因する教育格差が是正され、社会的公正が実現されること。

○実現を阻む・阻んでいる要因：

- 子どもたちの多様な発達、アクティブラーナーにはなっていない子ども、様々な困難を抱える子ども（特別な配慮が必要な子ども、社会的経済的に厳しい環境にいる子ども、外国にルーツがある子ども等）の存在と教師による伴走的支援の必要性。
- 上記の支援の難しさと教育予算の不足。
- 教育DXの観点からは、ストレスフリーのWi-Fi環境等のハード面の未整備等、その学校間・地域間格差。

2. 人口減少、人手不足

○ゴール：

- 居住地等に関わらず、安心して学べる良質な公教育がすべての子どもに保障されること。
- 公教育の担い手（教師等）が、十分に確保・処遇され、働きやすさと働きがいを両立されることで、そのウェルビーイングが担保されること。
- 公教育の担い手に新たな学びが保障されることで、それを子どもに還元できるような好循環を生むこと。

○実現を阻む・阻んでいる要因：

- 勤務環境の課題：教員・支援スタッフの予算の不足、多すぎる業務、既存役割からの撤退への納得性調達の困難性。
- 教師の勤務状況改善へ向けたデジタルの活用において、自治体間格差が存在（例：セキュリティが過剰に厳しい、クラウドの使用が認められない等）。
- 環境のデジタル化が進んでおらず、教員が専門性の本丸である授業で勝負しきれない状況。
- 校務システムが自治体間で異なることから、異動後の対応に苦慮する教員。
- 教員が作成した指導案や教材等の共有と流通が、学校内、自治体内等で閉じており、十分に進んでいない実情。

3. デジタルでの社会変革

○ゴール：

- 学齢期から一生涯にわたるオーダーメイドの学びの実現→自ら学び続ける人材。
- テクノロジーを用いた学びとリアルな学び（含：自由で多様な実体験）、個別の学びと協働での学びのベストミックスによる新たな学びの実現。
- 教師による専門的知見からの質的評価と、収集されたデータによる定量的評価を両輪として利活用することによる、個々の学びの充実。

○実現を阻む・阻んでいる要因：

- 学齢期に閉じ込められる学びの姿、労働市場との関係性。
- ベストミックスによる新たな学びに必要なハード面の未整備等、その学校間・地域間格差。
- データの不足。
- データ利活用人材の不足と地域間格差。
- 「やってみる」という試行錯誤土壌の欠如と格差←社会の目。